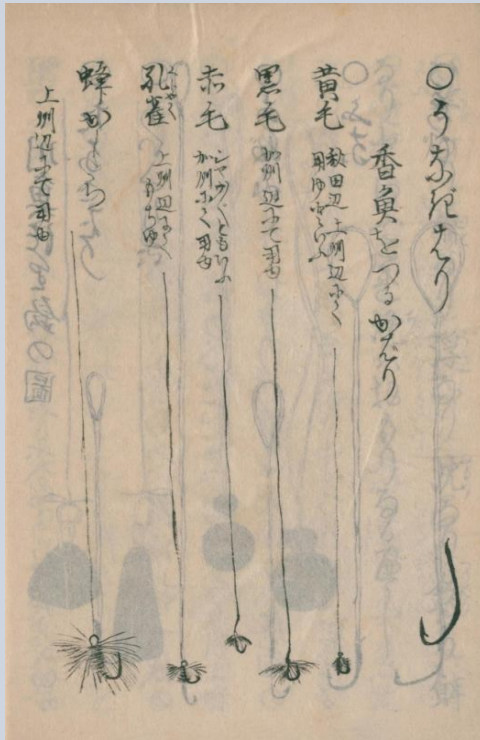


日本における毛鉤と毛鉤釣りの歴史 - 1

飛鳥・奈良時代		江戸時代	明治	大正	昭和	平成
592	794	1603	1868	1912	1927	1989
* 百済滅亡により製鉄技術が伝来。 「踏鞴(たたら)」が築かれ、山棲みの人が出る。(660)		平安・鎌倉・室町・安土桃山時代の釣り関連の資料はほとんど無く省略。				
		■ 西洋式の毛鉤釣り（フライ） （レジャー、ゲームとしての釣り） Tグラバー、中禅寺湖で鱒釣りを楽しむ。(1889) * Tグラバー、Hパーレット、湯川に川鱒を放流。(1899-1904) * H ハンターは「東京アングリング・エント・カンツリー倶楽部」を中禅寺湖畔に創設。(1925)				
		■ 山里の毛鉤釣り（毛鉤） （山棲み人の食糧、地方色のある毛鉤と釣法） 奥山廻り役の記録に黒部川でイワナ釣りの五人組を見つけ取締ったとあり、毛鉤釣りの可能性がある。(1694) 遠山品衛門、釣りを始める。(1872-) * アーネスト サトウ氏の立山登山の日記にイワナの毛鉤釣りの記述がある。 * ガイドをし、イワナを釣ったのは遠山品衛門といわれている。(1878) 「日本水産捕採誌」に奥多摩に於ける鰍釣、縋糸と馬素に蜂形の擬餌鉤三個を以てすとある。(1910) *				
		■ 都の毛鉤釣り（蚊鉤） （公家や武士が鍛練やゲームとして楽しんだ華やかな釣り） * 「続日本後紀」に承和8年(841)に慶仲が瞬時に百余尾を釣りあげたとあり、毛鉤釣りの可能性がある。(869) * 加藤清正が肥後藩士に蚊頭釣りを奨励したと言われている。(1588-) 伝承されている肥後の蚊頭釣りはテーパーライン(馬素)を使い3本の蚊鉤をもつ釣り。 * 京都の職業案内「京雀跡追」に「はへ頭(蠅頭)」の記述がある。 文献で確認されている最古の毛鉤。(1678) * 「京羽二重」に「釣蠅頭」と魚釣針屋「伊右衛門」の名がある。(1685) * 「西鶴俗徒然」井原西鶴著に京都宇治川での蠅頭によるオイカワ釣の記述がある。(1695) * 「本朝食鑑」人見必大著に蠅頭による鮎釣り、鮠釣りの記述がある。(1697) * 「諏方かこの」に鶏の毛を虫状に巻いた「巻き針」による釣の記述がある(1756) * 「朝陽館漫筆」の「千曲川の捕魚法」にオイカワの蚊釣について記述がある。(1810)				
		* 葛飾北斎の「千絵の海」が版行。「蚊針流」は肥後の蚊頭釣りそのもの。(1833) * 城東漁父の「魚獵手引」に蚊鉤5種の挿絵があり、「蜂がしら」という毛鉤がひときわ大きいことからヤマメ(アマゴ)、イワナの毛鉤の可能性もある。(1834) * 「兵庫県漁具図解」に加東郡瀧野村の擬餌鉤四個を付けた鮠の蚊頭釣がある。(1897) * 盛岡流し毛鉤釣りが馬素を使う「一本毛鉤」という釣法に手を加えてできたと言われている。(1920年代)				
[関連資料]		* 加賀前田藩は武士の特権として武芸の鍛練に川釣り(アユ)を奨励。 三代藩主利常(1605-1639)は幕府への恭順を示すため武芸の奨励を控え、美術工芸に力を入れ、心身を鍛練するために釣りを奨めた。(1605-) * 誰もが釣りを楽しめるようになる。(1780年頃) * 京都三条の永原屋茂八が「菜種鉤」を売り出す。(1818) * 江戸風俗百科事典「嬉遊笑覧」喜多村信節著に「香魚を釣るに蚊頭というものをを用い」とある。(1830) * 加賀の17代目細八郎兵衛が蚊針を売り出す。(1873)				

■ 日本における毛鉤と毛鉤釣りの歴史 - 2 (毛鉤の分けイメージ図)

■ 都の毛鉤 (蚊鉤)



* 城東漁父の「魚獵手引」蚊鉤の挿し絵 (1834)
国立国会図書館デジタル化資料

「香魚をつるかばり (鮎を釣る蚊鉤)」として
蚊鉤 5 種の挿絵があり、「蜂がしら」という
毛鉤がひととき大きいことからヤマメ (アマゴ)、
イワナの毛鉤の可能性もある。

■ 山里の毛鉤 (毛鉤)

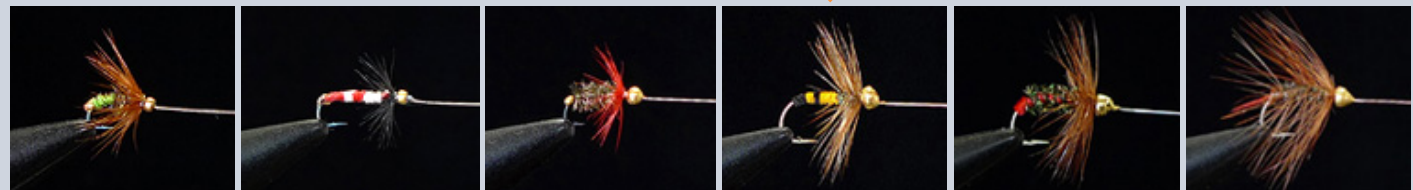
西洋式の毛鉤(フライ)の影響？



* 地方色のある伝承毛鉤



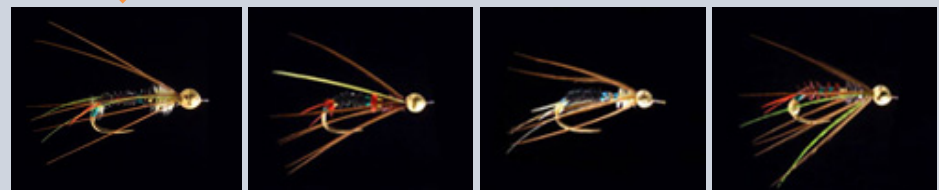
都の毛鉤釣り(蚊鉤)の影響？



* 西洋式のフックサイズでおよそ#20-16の大きさの蚊鉤

* 「山女魚毛鉤」と表示されている大型の蚊鉤
鮎釣りのために改良工夫された専用の毛鉤

■ 鮎の毛鉤



* 加賀毛針 画像提供：目細一郎兵衛商店 <http://www.meboso.co.jp/>